八幡病院と郡上市民病院の入院機能統合に向けて

中濃圏域における地域医療構想において、郡上市民病院は郡上地域の急性期医療の中心的役割を担うこととし、状況に応じて中濃厚生病院も担うとされています。

入院患者の減少をはじめ、様々な課題が山積するなか、郡上南部地域における医療の再生を目指して、八幡病院と郡上市民病院は入院機能の統合に向けた協議を進めています。こうした中、両院で取り組んでいる「中濃構想区域」が、厚生労働大臣から重点支援区域に選定されました。今後、国県等の支援を受けながら入院機能の統合を実施します。

◆両病院の患者の動態

両院の入院患者数は新型コロナウイルスにより大きな影響を受け、コロナ禍以前と比べると未だ回復途上にあります。郡上市民病院では、コロナ罹患者に対応するため療養病床を閉鎖し、2023年12月に病床を一部再開するまでの約３年間、患者さんがいない状態が続いていました。現在、療養病床は20床で稼働しており、残りの30床は休床としています。

八幡病院についても市民病院と同様に入院患者さんの減少が続いています。療養病床については、2022年11月に27床を20床に減らし、その後、2023年５月末をもって閉鎖しています。

【入院患者延べ数】（各年の期間：前年７月１日から当年６月30日）

（人）

種別	医療機関	2017年 (H29)	2018年 (H30)	2019年 (R１)	2020年 (R２)	2021年 (R３)	2022年 (R４)	2023年 (R５)	2024年 (R６)
一般病床	市民病院	29,197	29,825	31,083	31,887	30,587	16,448	29,090	28,837
	八幡病院	9,442	10,481	9,506	10,218	8,577	8,307	7,553	10,476
療養病床	市民病院	14,665	10,710	15,867	12,563	0	0	0	411
	八幡病院	9,458	8,778	8,263	8,235	8,121	8,289	5,680	0

出典）厚生労働省「病床機能報告（岐阜県）」

岐阜県の２次医療圏別患者推計（中濃）によれば、郡上市の患者は、2022年の3,716人から、およそ30年後の2050年には、約24%減の2,842人となる見込みです。年代別にみると、０～64歳までは50%を割り込み大幅な減少となりますが、65歳以上は約86%、75歳以上にあっては約97%に止まり、高齢者については緩やかな減少となる見込みです。

【患者推計】（２次医療圏別患者推計＜中濃圏域＞）

（人）

種　別	2022年 (R４)	2025年 (R７)	2030年 (R12)	2035年 (R17)	2040年 (R22)	20245年 (R27)	2050年 (R32)
総　計	3,716	3,621	3,497	3,383	3,250	3,071	2,842
年少人口 (０～14歳)	102 (2.7%)	88 (2.4%)	72 (2.1%)	62 (1.8%)	56 (1.7%)	51 (1.7%)	46 (1.6%)
生産年齢人口 (15～64歳)	797 (2.14%)	738 (20.4%)	665 (19.0%)	602 (17.8%)	525 (16.2%)	448 (14.6%)	379 (13.3%)
老齢人口 (65歳以上)	2,817 (75.8%)	2,795 (77.2%)	2,761 (79.0%)	2,720 (80.4%)	2,669 (82.1%)	2,572 (83.8%)	2,417 (85.0%)
(再　掲) 75歳以上	1,950 (52.5%)	1,974 (54.5%)	2,026 (57.9%)	2,055 (60.7%)	2,051 (63.1%)	1,976 (64.3%)	1,886 (66.4%)

出典）厚生労働省「病床機能報告（岐阜県）」

疾患別患者推計を見ると、心不全、誤嚥性肺炎、股関節・大腿骨近位の骨折については、2050年頃までは増加傾向であり、脳梗塞、肺炎、腎臓または尿路の感染症については2035年頃までは増加傾向となっていますが、以後は減少に転じる見込みです。

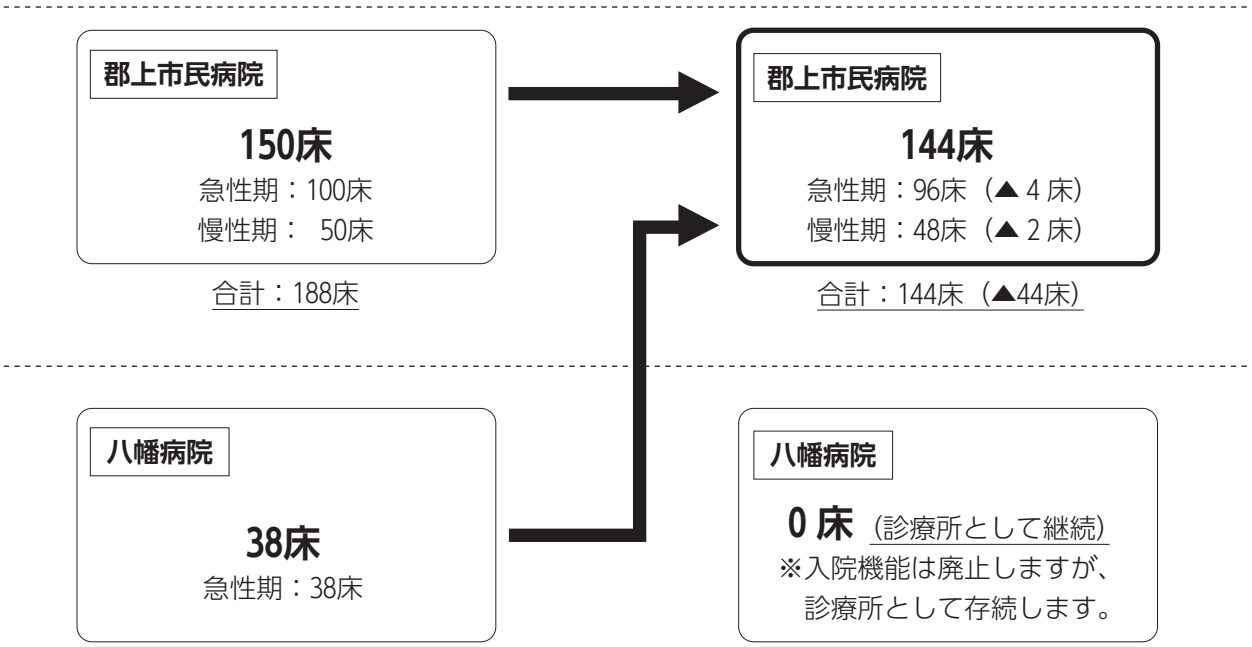
疾患別患者数を75歳以上の高齢者で見ると、心不全、脳梗塞、誤嚥性肺炎、股関節・大腿骨の近位骨折、腎臓または尿路の感染症は2040年頃まで増加傾向にあります。

◆機能統合に向けて

現在の両院の許可病床は、八幡病院38床、郡上市民病院150床の計188床となっています。なお、郡上市民病院は許可病床150床のうち116床しか稼働しておらず、残りの34床（急性期４床・慢性期30床）は休床しています。

高齢化社会や地域の人口動態の変化により、患者数の減少はもとより、医療スタッフの不足に伴う病床の稼働が制限されるなど入院機能の維持が困難になりつつあることから、八幡病院の38床を廃止して無床診療所としたうえで、市民病院に入院機能を統合し、医療スタッフの集約に努めることとしています。

【病床再編の方向性】



■両院の経営改善

今回の病床機能の統合に当たり、郡上市民病院としては施設の有効活用を図りつつ、スケールメリットを生かした効率化による収益の改善を図ることが期待されます。一方、八幡病院においては、入院機能を郡上市民病院に統合することにより診療所として運営することとしています。これにより人件費、材料費、経費、医療設備費等を大きく削減できることが期待されます。このように、両院の経営改善を目指していくことも目的の一つとしており、郡上南部地域の病床数を適正化しつつ、入院医療を確保することを計画しています。

■関連施設との連携

八幡病院が運営する「デイケアセンターなごみ」や郡上市民病院が運営する「訪問看護事業」については、連携もしくは統合も視野に検討を進めながら、老人福祉施設せせらぎ緑風苑との連携を強化していきます（老人福祉施設せせらぎ緑風苑と郡上市民病院との間で協力医療機関協定書を締結しています）。

■外来機能の連携

八幡病院は現在の診療科を維持して診療所として存続します。このうち、消化器内科系の患者については、郡上市民病院の消化器外科系医師との連携も含め、外来から入院までを郡上南部地域で完結できる体制を構築していきます。また、循環器内科系患者については、現在構築されている関係を維持向上させます。

なお、入院機能の統合先となる郡上市民病院においては、現在の人員では多くの患者を受け入れることは非常に困難です。このため、看護師や介護スタッフをはじめとした医療スタッフの確保が欠かせないことから、引き続き協議を行うものとしています。なお、今後も、2040年、2050年の推計人口や疾患別患者推計などを参考に、継続して病棟機能の変更を検討していく予定です。

問 郡上市民病院総務課　65－4140